

研究に先行性を

鈴木 弘*

Hiromu SUZUKI

蒸気機関で推進するいわゆる汽船が発明されたのが、1807年、すなわち今から170年も前のことである。徳川300年の泰平の夢を打破った黒船の到来は、それから50年も経った後のことであるから、その発明は実に早く、いわば大昔の出来事であった。

われわれが文明の利器として現在そのお陰を享受している工業製品の中から、今から100年以上も昔に発明されたもので、目立つものを拾ってみると、水力タービン・電気機関車・ガソリンエンジン・電話などがあって、その発明はついふん昔であったのに驚かされる。

80年前までと範囲を広げると、蓄音機・電燈・カメラ・交流モータ・自動車・飛行機・蒸気タービンと、現在の文化的生活を支える基礎となっている機械の中の重要なものの大部分が含まれている感さえあるのには、ますます驚かされる。

機械工学や電気工学の分野での最近の進歩も決して遅くはないように思われるし、私が大学を卒業して以後の40年近い年月の間の原子力工学や電子工学の諸技術を中心とした工学と工業との進歩は、まことにめざましいものがある。近代的な工業の進歩は最近の数十年に達成されたのではないかと思われるというのが私の実感である。それにもかかわらず、100年も前から多くの重要な発明がなされてきたことは厳然たる事実である。機械工学や電気工学の学問としてのレベルが現在に比べてはなはだしく低かったことを思えば、当時の発明とその基礎となった研究とが、いかに先行的なものであったか、どれほど時代に先がけていたかは、想像できようというものである。あるいは、そんな言分は不遜であって、われわれが想像もできないほどにその時代の常識とは格差の大きく常人の思考とはかけ離れたものであったというのが真相かも知れない。

当時の、これらの、時代に大巾に先行した研究成果、ひらたくいえば発明が、アメリカで最も多く誕生していることも、非常にきわ立った特徴である。実は前記の例に引いた諸発明は全部アメリカ人により行われたものばかりである。

また現在でも工業技術の技術貿易で圧倒的な輸出超過の実績を示しているのはアメリカであって、欧州の工業先進国はいずれもアメリカには遠く及ばない。いわばア

メリカは過去において発明の中心国であったし、現在もそうである。

獨創性や天才的なひらめきではラテン系の人種がすぐれているとの通説がある。この説の真偽のほどは知らないが、少なくとも、アメリカ人が最も天才的な人種であるとの説は聞いたこともないし、またアメリカ人は単一の独自の人種でないことは万人の知る事実でもある。

人種的な理由がないとすれば、アメリカという国に限って発明が非常に多数生まれる理由は、アメリカという国の持つ社会組織や物の考え方にあるとしか思えない。しかし、それを論理的に立証できるほどには、アメリカという国の社会の実態を知らないし、諸資料も持合せていないので、この見方は、いわば私の感じの域を出ないのは残念である。

しかし、日本の社会には、発明の生れてくるのに障害になりそうな条件がまだまだ多数残っていることは容易に指摘できる。たとえば、日本のほとんどすべての会社では、社員が発明をして特許を取った時の報償がきわめて軽く、一件当たり数千円程度に過ぎない。出願手続を代行する弁理士に払う料金が1ケタ上の数万円であるから発明という知的な創造的作業がその事務手続よりも軽く評価されているということになる。不思議な現象といわねばなるまい。

このように、わずかの報償金で済ませている結果として、社員に払われる特許報償金の総額は、同じ期間に外国技術の導入のために支払われる技術料の数十分の一程度でしかない、という驚くべき数字が出てくるのである。自主技術の重視、その開発への積極的姿勢を説く経営者は多いが、その会社でこのような事態が当然として行われているとすれば、それは漫画の画題であろう。

アメリカでは、特許の報償金のおかげで社長以上の金を会社から受取る社員がいる例もある、という話が、会社の実名までいわなくても事実として受取られるのも、日米両国の発明力の大差が厳然たる事実であるからである。

わが国でも、発明を奨励する具体的な方策をどしどし実施すれば、それに応じて発明もどしどし出て来そうに思われる。いや必ずそうなるであろう。

*東京大学生産技術研究所 第2部